

「チェコへの扉—子どもの本の世界」 関連講演会「チェコの児童書の歩みと研究の今」

平成 20 年 7 月 12 日

講師：マルチン・ライスネル (Martin Reissner)

通訳：村上 健太

本日はわざわざご足労いただき、この会場まで来てくださり誠にありがとうございます。今日、私はチェコの子どもの本について、特に今の状況についてお話をさせていただきますけれども、皆様にとって非常に興味があり、役に立つものであることを願っております。

ただいまこの図書館において展示会「チェコへの扉」が開催されていますが、そちらの方ではチェコの基本的な事柄から紹介するコーナーを設けておられます。チェコはもともとオーストリア帝国の一部でしたがチェコスロヴァキアになり、そしてたゞいまはチェコ共和国として独立、分離をして 15 年経つところです。

我々の言語はチェコ語です。チェコの中には 95 パーセント以上がチェコ人、それ以外はスロヴァキア人がいますが、ほとんどの方がチェコ語で話しています。チェコ語という言語はスロヴァキア語、ポーランド語、それから少し離れてしましますがロシア語にも似た関係を持っております。

手短に歴史のことを振り返ってみますと、オーストリア帝国がチェコを支配して、18 世紀から 19 世紀にかけて民族復興という運動がありました。チェコの文化あるいはチェコ語というものが独立していき、そして 1918 年にチェコスロヴァキアという国家として成立いたしました。それから 1939 年に一回解体いたします。その後、ドイツに占領され、第二次世界大戦が終わる 1945 年までその状態でした。そして 1948 年に社会主義体制に組み込まれて、その時代がずっと続いていきました。その体制が崩れたのは 1989 年のことです。チェコは当時チェコスロヴァキアだったのですが、民主主義体制の中に入りました。そして 1993 年に分離、独立してチェコ、そしてスロヴァキアという別の国家となったのです。それが歴史上、非常に大まかな枠として、チェコの歴史がこの 2 世紀の間どのように発展してきたかということを示し上げました。

チェコの文化はいろいろありますが、その中で児童文学という分野があります。これは大体 100 年の歴史を持っているというふうに言うことができます。そしてそれ以前は子どもに特に向けられたジャンルとして独立していませんでした。それが児童文学ということに独立してくるのは今から 100 年くらい前です。チェコは人口 1,000 万人程度と、東京よりも小さいくらいの規模を持つ国ですけれども、その規模の割には文化という観点から見ると非常に高いレベルを保っていると言うことができます。世界的に名が知られ

ている文学者ということでその例を挙げますと、ノーベル賞を受けたヤロスラフ・サイフェルト (Jaroslav Seifert) という詩人がいます。児童文学、子どものための本のことで申しましてもよく知られているイジー・トゥルンカ (Jiří Trnka) であるとか、著者の方ではボフミル・ジーハ (Bohumil Říha) という名前を挙げるができます。

共産主義、民主主義の出版状況

本日はすべての歴史を振り返るわけにはいきませんので、特に 1989 年以降の状況、1990 年代、そして 21 世紀になってからの状況というものを順番にお話ししていきたいと思えます。1989 年から 1990 年にかけて非常に大きな変化がチェコにありました。それまでチェコにおいて支配的であったのが、出版社というものが国家の統制の下に置かれていて、その国家の検閲を経て出版物を出していたということです。それまでの状況はアルバトロス (Albatros) という出版社がすべて一手に児童書を出版しておりました。そのほか地方においていくつかの出版社があり、児童書を出版していましたが、これは部数規模としては非常に小さいものでした。その本を卸す業者もただ一つだけで、これも国家の統制の下で行われていたのです。それまではいつ、どのような本がどのような形で出るかということはおあらかじめ前から決まっておりました。毎週木曜日になると、何らかの新刊が出ると前もってわかっていたのです。その当時は自由に本を出すということではできませんでした。すべての本に対して国家の許可が下りたわけではありません。

その状況が一変しまして、90 年代になると社会主義体制が崩れます。1990 年になりますと、誰でも自由に出版社を設立することができ、どんな本でも出版することができる状況になりました。先ほど申し上げましたように、1989 年までは原則的にただ一つの出版社が児童書を出版していたのですけれども、1990 年から 1995 年まで、雨後の筍のように何千、何万という出版社が出てきました。そしてたくさんの出版社が、その一つの部分として子どもの本を出版したということになりました。しかし、非常に質の悪い子どもの本も含まれておりました。そして社会主義時代はなかったのですが、「非常に質の悪い本」という言葉が長い時を経てまた使われるようになってしまいました。

共産主義という体制は悪い面をたくさん持っておりましたが、子どもの本に関してはよい面が現れていたのです。それというのはアルバトロスという出版社がすべてを管理しており、質の悪いものはそもそも出版前に出版することを禁じていたので、世に出るチャンスが全くありませんでした。そしてこの時代に、やはり出版が許されなかったものとしては、質の悪いもののほかに、共産主義の理念に反するものでした。たとえば宗教的な内容を持つもの、偵察をテーマにしたもの、そして亡命をした作家たちの作品といったものです。こういった状況が続いたのですが、1990 年になって全く一変してしまっただけです。1989 年から 1990 年にかけての状況というのは非常に混沌を極めておまして、どのようにチェコの児童書が発展していくか、試行錯誤を繰り返した時代だというふうに言えると思います。チェコの本だけではなくて、どんどん外から輸入されてくる質の悪い本に対してどのように伝統を守るかということも一つの大きな課題でした。

この状況が落ち着いてきたのは大体今から 10 年前くらいで、1995 年から 1998 年くらいのことだったと思います。その頃になると、割と一定の質を持った本を出版する出版社が残り、落ち着いてきたというふうには言えると思います。そして 90 年代になりますと、学問研究の面から体制が整ってきました。そしてその中心になったと言えるのが、ブルノのマサリク大学教育学部に設けられた児童文学研究所です。もちろん、子どもの本や児童文学にかかわる学部や学科は、プラハ、それから北チェコのリベレツ、そして南チェコのチェスケー・ブジェヨヴィツェの大学にも設けられました。

子どもの読書状況

児童書に関係のある図書館の観点からいいますと、社会主義時代は人民図書館という形で非常に整備されておりました。しかし 1989 年以後は財政的な理由から、危機的な状況に立たされてしまいました。今はそのような状況は一応過ぎて、図書館によっては以前にも増して充実しているところがあります。それは国家、町、そして地方からの支援によって立て直されたということです。チェコにおいては、どんな小さな村の図書館に行っても子どものためのコーナーが設けてあります。そしてそういったネットワークはどんどん広がっています。

もちろん学校も大きな役割を果たしておりまして、ほかの国と同様、低学年のときから大学直前、6 歳から 18 歳まで当然国語も習っており、ここにも力が入れています。学校の中では文学教育の科目もあります。これは音楽、造形美術の教育と同様に設けられています。子どもは重要な子どもの本の需要者、受け手になりますが、基本的なデータとして 96 パーセント以上の子どもが第一の言語、国語としてチェコ語を学んでいるということです。

そして子どもの中で読書好きは、大体 30 パーセントくらいです。そして 2002 年から 2003 年の調査によりますと、22 パーセントの子どもが毎日、本を読んでいます。ということは、先ほどの数字と合わせますと 52 パーセントが何らかの形で、日々、本と近く接していると言えます。この数字はヨーロッパ全体の標準からしても、大きな比重を占めています。残りの 48 パーセントがどうなのかという話になると非常に大きな教育上の問題になってくるので、この場では申し上げませんが、本日はこの 52 パーセントという数字を強調させていただきます。6 歳から 15 歳までの子どもの人口は 103 万人で、これは全人口の 10 パーセントを占める数字です。

子どもの本のための雑誌

全般的な話はここまでにして、これから具体的に皆様に現在のチェコの子どもの本をご紹介します。はじめに、子どもの本と子どものための雑誌です。チェコには昔からある二つの有力な子ども向けの雑誌があります。そのうちの一つがこの '*Mateřídouška*' というもので、意味としては植物の名前です。じゃこう草の一種らしいのですけれども、こういう名前を冠した雑誌があります。この雑誌は 1945 年から歴史がありまして、植物の名前に由来しております。それと同時に、母性と訳せる *mateřství* も連

想され、それと掛け合わせて命名されたということです。これが発刊された当時、この雑誌にかかわった人たちというのは第一級の児童文学作家でした。もちろんイラストの面でも、当時を代表する方たちがかわったと言われておりました。その例として、今ご覧の‘*Mateřídouška*’の一番上にロゴがあります。これはチェコの国民画家の一人であるヨゼフ・ラダ (Josef Lada) のもので、ずっとこのロゴが使われております。この雑誌は大体学齢になる子どものために作られたものです。そしてこの中にはいろいろ散文であるとか、詩が掲載されているのですが、特筆すべきなのはこの雑誌のために描かれたものも数多くあるということです。残念ながら最近の3年ほどは、これを発刊している出版社の方針の違いによって少し質が変わってきておりますが、また将来、以前と同じような質を保てるように願っております。これは図書館にもちゃんと納品され、保管されているもので、それを子どもたちが昔の20年、30年前のどの号にしても、検索をして借り出すことができる体制になっています。

もう一つの有力な雑誌は‘*Sluníčko*’、「おひさま」という名前の雑誌です。こちらも先ほどの‘*Mateřídouška*’と同じくらいの子どもたちに向けられた非常に質のよい雑誌です。文字を読み始めたくらいの子どもたちに向けられております。90年代以降、この二つのもの以外にもいろいろ雑誌が出ておりますけれども、見る、読むに値しないような質の悪いものが増えております。そういったものの多くは外資が入っておりまして、アメリカからのものが多いのですが、翻訳を中心に記事を書かせております。イラスト、テキストの面からしても質としては悪いものであるということです。

次は子どもの本についての批評誌をご紹介します。批評を特に載せた専門雑誌に関して言うと、昔は一つだけあったのです。それがこちらにある‘*Zlatý máj*’、「黄金の5月」という意味で今は存在しておりません。これもやはり春を象徴する植物からとられている非常に詩的な命名です。この雑誌は「子どもの本についての雑誌」という副題があります。これはチェコスロヴァキア時代からあるものなので、チェコ、そしてスロヴァキアの本について書かれたものです。この雑誌は、1989年以降の自由主義経済の新しい体制の中で犠牲になりました。結局財政状態が悪く、最後の方は1年に一度出るような状態になって、仕方なく廃刊となってしまったのです。

現在の時点で、この‘*Zlatý máj*’を継承するようなチェコ児童文学についての専門誌として‘*Ladění*’という雑誌があります。このLaděníにという名前は「調和、調律、音合わせ」というような意味ではあるのですが、それと同時に昔、フランチšek・ハラス (František Halas) という有名な詩人が書いた有名な子ども向けの詩集からとられた名前でもあります。この雑誌はブルノのマサリク大学から出ているものなのですが、1990年からの歴史があります。この雑誌の上の方にあるのですが、「児童文学の理論と批評のための雑誌」という副題がついております。そしてこの中の構造というものは発刊当時から変わっておりません。年に4回出る季刊の雑誌です。そしてエッセイ、論文、それから歴史についての記事、理論というような記事がいつも載せられています。それと同時に書

評の欄もあり、最近チェコでどのような児童書が出たかを紹介してあります。今画面に表示されたものは、別の雑誌の号を見ていただきました。そのほかにも世界の行事について、チェコではどのような児童書のイベントが行われているか、あるいは世界からのニュース、もし何かの記念（作家、挿絵画家についての生誕何年など）があると、それにかかわる記事もやはり掲載されております。さらに、今、たとえば作家が何を書いているか、どういう絵を描いているか、という最近の活動も紹介しております。最後の部分ではチェコの出版社の方針、どのような児童書が出ているかについて書かれています。私も非常に深くかかわっており、私が勤めているところから出ていますが、一つの方針として、チェコとスロヴァキアの児童文学に携わっているということです。ですからチェコだけではなくてスロヴァキアの作家たち、挿絵画家についての記事も同様に載せています。この雑誌は、小学校から大学まで専門にしている教師、図書館の方、児童文学を専門にしている方、出版社の方、そして現在子どもを持っている親へ向けて書かれています。これまでお話ししたのがチェコにおける児童書についての批評、雑誌についてでした。次は、チェコにおいて児童書にどのような賞が与えられているかをお話したいと思います。

子どもの本における賞

以前、共産主義時代にあった賞というのはすべてなくなりました。それはイデオロギー上のこともあり、今日まで生き残っている賞はありません。今ある中で一番古い歴史を持っているのは「黄金のリボン」と呼ばれている賞です。この賞は90年代の前半からあります。そして以前と今と、内容的にも少し変わってきたところがあり、それについてお話しします。90年代の前半において、なぜこの賞が設けられたかということ、非常に質の高い本を援助するという第一の目的がありました。つまりその当時、子どものための本全体が非常に悪い状況にあり、俗悪なものが出てきたので、その中から優れたものを顕賞ということが第一としてあったのです。その後90年代の後半になると純粹にチェコにおいて、どのような本が最も優れているかということに関心の的が移ってきました。この賞を授与しているのはチェコの作家同盟、それからIBBYのチェコ支部、そして翻訳家協会、挿絵画家の団体となっております。この賞は現在のところ、三つのカテゴリーにおいて賞を授与しており、第一は造形の部分、つまり挿絵です。そして第二に文学的なもの、テキスト、最後に翻訳が優れているかという関心を基にしています。そしてそれぞれのカテゴリーにおいて、幼少向けとヤングアダルト向けの二つに分かれています。現在、私（ライスネル博士）が持っているのは昨年版です。画面に映っているものはそれ以前の版です。以上が「黄金のリボン」賞でした。

第二の賞として「マグネシア文学賞」があります。この賞そのものが児童書向けではなくて、一般文学に対して与えられます。その中の一つとして児童文学部門があるということです。この賞はかなり注目を浴びており、というのも賞金がかかなり大規模なもので、それが故にテレビやラジオでも非常に大々的に話題になります。

第三の賞としてありますのが、チェコの文化省が授与するものなのですが、その

まま訳しますと、「この1年の最もすばらしい本」という名前の賞です。これは純粋にテキストだけではなくて、本全体の出来を見て与えられるもので、子どものための本が第一位に輝くこともあるのです。テキストの面だけではなくて、グラフィックの面でも審査の基準があって、それを総合的に判断して与えられるということです。今大体講演が始まってから1時間くらい経ちます。このへんで少し休憩をとりまして、どのようなチェコの児童書の情報源があるかということと、具体的にどのような本が今人気があるかということをご紹介しますと思います。

子どもの本の情報

それでは続けさせていただきます。今、皆様非常に興味のある分野かもしれませんが、チェコの子どもの本についての情報源がインターネットも含めて、手軽にどういったところから手に入れられるかということを紹介したいと思います。はじめに、大まかにどういった情報源があるかということをご紹介します、その後で細かくそのコンタクト先をお見せしたいと思います。

チェコにおいては毎年のように、子どもの本についての会議が開かれております。その中で最も大きなものは毎年ブルノの研究所で開かれているもので、毎年夏頃に行われます。今ご覧の画面の左上の方にありますのが、その会議の成果としての冊子になります。これは毎年テーマを変えて開かれておりますが、左下の方に先ほどの雑誌と同じ‘Ladění’というロゴを見ることができます。この号は2年ほど前に出たものなのですが、児童文学についての文芸批評など、そういったテーマが副題として付けられています。この冊子はチェコ語、そしてスロヴァキア語、場合によってはドイツ語で書かれていますけれども、それぞれに短いのですが英語のレジюмеも付け加えられています。

画面下の方にご覧になっておりますのが、これはチェコの文化省から出されている年に1回出されるもので、チェコの児童文学についての冊子になります。ご覧のものは、昨年出されたもので、いろいろな情報がこの中にあるのですが、特にこれは外国において、チェコの児童文学に興味を持っていらっしゃる方のために出されています。これは昨年出されたものですから、内容は一昨年のもので、どのようなすばらしい作品がチェコの児童書として出されたかということが紹介されていると同時に、専門的な内容のものも多く含まれています。昨年の号の特集は詩（ポエジー）です。そこでは詩の歴史、それから批評、挿絵、そして特にチェコの非常に有名なイラストレーターの一人であるヨゼフ・パレチェク（Josef Paleček）についての記事が特集されています。この冊子においてはテキストとしてどのような質のよい本が出ているかということもあるのですが、イラストについても必ず紹介記事があります。

昨年の号においては、ヨゼフ・パレチェクだったのですが、今年の号においては、フチーコヴァー（Renáta Fučíková）というイラストレーターが特集されています。今年の冊子のテーマは「歴史的な物語」でした。そしてこのフチーコヴァーというイラストレーターは特にそういった物語に対してイラストを描いているのです。先ほど申しました「黄金

の「リボン」賞を受けた人でもあります。そして昨年はチェコの国民的画家であるヨゼフ・ラダの死後 50 年にあたりましたが、その特集も組まれました。

今からインターネットの面で、どのような情報があるかということをお知らせ申し上げますけれども、その一つとしてチェコの文化省のホームページがあります。

<http://www.mkcr.cz/>

これはチェコの児童文学に限らず、チェコ文学全体について紹介されており、チェコ語、それから英語、ドイツ語、フランス語のバージョンがあります。もう一つの有力な情報源としては IBBY のチェコ支部のホームページがあります。こちらでは IBBY が主催している展覧会、いろいろなセミナーなど、それについての情報が盛り込まれています。そしてチェコの国会図書館にあたる、国立図書館があります。

<http://www.nkp.cz/>

こちらの方では児童文学も含めて、どのような本が出たかというのがすべて一目で検索できるデータベースがあります。そしてまた私が住んでいるブルノの市立図書館のホームページも、情報源として大変役に立つものを提供しています。

<http://www.kjm.cz/>

そしてこれは専門家が開設したものではないのですが、一般の人たちが原稿を寄せる、たとえばその本を読んでいる親などが書き込むような書評のページがあります。それはいろいろな記事が出てきて、そのときどきのチェコの人々の意見を参照することができます。大変貴重なページです。

児童書出版社について

そして出版社についてもご紹介したいと思います。現在の時点で質の高い児童書を出版している出版社にどのようなものがあるかということです。



左上から始めましょう。「アルバトロス」(Albatros)という非常に知られた出版社があります。アルバトロスは以前国有のものだと申し上げましたが、今は普通の私有の企業にあたります。この出版社は独特でユニークな面を持っておりまして、一つの側面というのは、昔この出版社を通して出版された作品がたくさんありますが、テキスト、絵などの著作権をすべて持っていて、ここが出所になっています。そして昔の古典的な作品を改めてどんどん出版しています。昔の方は名作を出しているのですけれども、新しい本に関して言いますと、非常に変わった側面を持っておりまして、質としては非常に疑われるようなものも最近では出してしております。誤解を恐れずに言いますが、現在のところ、アルバトロスはチェコの児童文学界の中では非常に特異な位置を占めているとすることができると思います。

次は「アムレット」(Amulet)という出版社です。馬に乗った子どもがラッパを吹き鳴らしている絵がロゴになっています。このアムレットという会社は5年ほど前にできたのですけれども、その後つぶれてしまいました。しかし特筆すべきことは、翻訳にしても、国内の作品にしても、非常に質のよい本を出版していたということです。

この「アルゴ」(Argo)という出版社を次に紹介するのですが、こちらは普通の一般書で、児童向け専門というわけではありません。その一部として児童向けのものを出しているのですけれども、特色としては、伝説、神話、外国起源のもの、あるいはおとぎ話も重点的に出版しています。

その次に「ムラダーフロンタ」(Mladá fronta)という右上にある、「mf」と書いてある出版社があります。この出版社は革命以前、1989年以前から存在している有名な出版社で、やはり一部として児童書を出しているのですが、こちらも質の高い本を出しています。

左の真ん中にこぐまが木を持っているというような図柄のロゴがありますが、これは「バオバブ」(Baobab)という出版社のもので、これも最近出てきたもので質の高いものを出していて、評価されている出版社です。

そしてその隣にある「メアンデル」(Meander)という出版社がありますが、これもバオバブと同様に最近出てきたもので、やはり評価されて賞も受けています。

そしてこの次にアルファベットの「K」(Knižní klub)という図柄をしたものがあります。このまま訳しますと「本のクラブ」と直訳するしかないのですが、このような出版社があります。こちらも比較的良質な本を出版している会社です。

その次に人の顔を模したロゴがありますが、「オリンピア」(Olympia)という出版社です。こちらの出版社は過去においてはいろいろと名作を出したのですが、現在のところは出しておりません。

それからかなり小規模の出版社になりますが、その始めの例としてこの「オリンピア」という青いもの下に「プロット」(Plot)という出版社があります。

一番左の下に、「S」が向き合っているものがあります。これは「アンドレイ・シュチャストニー」(Andrej Št'astný)という、まさにそういう方がこの出版社を所有しているの

ですが、その名前を関した「アンドレイ・シュチャストニー」という出版社があります。

それから一番右下の方に「ディブク」(Dybbuk)という出版社の絵があります。こちらの方は非常に活動としては小さくて発行する点数も少ないのですけれども、非常にユニークな児童書ものを1年に1回出版するかどうかというところなのですが、注目されています。

真ん中の下にある、「プラーフ」(Práh)というものがあります。プラハにある出版社なのですが、「黄金のリボン賞」を数々受けたこともあり、将来非常に注目すべきよい出版社であるというふうに思います。

最後になりましたけど「ブリオ」(Brio)という、猫が杖のような物を持っています。「ブリオ」というのはフランスとチェコ、共同の資本が入っている出版社です。造形美術の面に重きをおいた出版物というものを発行しています。

すべての出版社は、毎年あるいは半年に1回、それぞれ出版計画を出しています。たとえばアルバトロスという出版社は長い間、ずっとこういったプラン(Ediční plán)を毎年出していますし、今はありませんけれどもアムレットという出版社は、存在していた当時は半年ごとにこういった出版計画を出しておりました。

画面左の方に、プラハの一つの街区の名前をとった「ビシェフラット」(Vyšehrad)というものがあります。やはり子どものための本も出している出版社です。右の方にあります「フラグメント」(Fragment)という会社、こちらの方は特に教育目的の児童書を出しているところですが、たとえば、百科事典とかそういったものです。そして教科書も重点的に出している出版社です。

こういった出版社の力が大きくなっている象徴で、この「黄金のリボン賞」の表紙を見ると、この下のものがそうなのですが、出版社についての紹介記事があります。これもまた出版社がこういうところに力を入れて宣伝しているということの象徴です。こちらの方に書いてあるのが、今まで申し上げたもののコンタクト先やデータ一般です。たとえば一番後ろの上の方の真ん中に、「黄金のリボン賞」についての記事がありますが、先ほど申し上げましたように三つのカテゴリーがあり、それぞれの賞がどこに贈られたかということが書いてあります。

Oborové, muzejní a knihovnické instituce/Professional, Museum and Library Institutions



Ústav literatury pro mládež
(Youth Literature Institute)
c/o Pedagogická fakulta
Masarykovy univerzity v Brně
(c/o Masaryk University Brno
– Faculty of Pedagogy)
Poříčí 7
CZ-603 00 Brno
T: +420 549 491 111
E: ladeni@ped.muni.cz
W: www.ped.muni.cz

Česká sekce IBBY
(Czech Section of IBBY)
c/o Obec spisovatelů
(c/o Writers Guild)
Železná 18
CZ-111 21 Praha 1
T: +420 224 234 060
E: obecspis@volny.cz

Sukova knihovna pro mládež
(Suk Library for Young People)
c/o Státní pedagogická
knihovna Komenského
(c/o Comenius State
Pedagogical Library)
Mikulandská 5
CZ-116 74 Praha 1
T: +420 224 930 096
E: pujcovna@spkk.uiv.cz
W: www.spkk.cz

Památník národního písemnictví
(National Literary Memorial –
Museum of Czech Literature)
Strahovské nádvoří 1
T: +420 220 516 695
W: www.pamatniknarodniho
pismnictvi.cz

**Národní knihovna České
republiky**
(National Library of the
Czech Republic)
Klementinum 190
CZ-110 01 Praha 1
T: +420 221 663 331
W: www.nkp.cz

Moravská zemská knihovna
(Moravian Provincial Library)
Kounicova 65a
CZ-601 87 Brno
T: +420 541 646 111
E: mzk@mzk.cz
W: www.mzk.cz

Vědecká knihovna Olomouc
(Scientific Library Olomouc)
P. O. Box 197
Bezručova 2
CZ-771 77 Olomouc
T: +420 585 223 441
E: library@vkol.cz
W: www.vkol.cz

Veletrh dětské knihy Liberec
Sdružení pro veletrh
dětské knihy
Masarykova 625/24
CZ-460 01 Liberec
T: +420 485 103 008
E: info@veletrhdetskeknihy.cz
W: www.veletrhdetskeknihy.cz

Garanti a partneři publikace/Guarantors and Partners

**Ministerstvo kultury České
republiky** (Ministry of Culture
of the Czech Republic)
P. O. Box 214
Milady Horákové 139
CZ-160 41 Praha 6
T: +420 257 085 111
E: minkult@mkcr.cz
W: www.mkcr.cz

Svět knihy, Ltd.
Fügenerovo náměstí 3
CZ-120 00 Praha 2
T: +420 224 498 234
E: info@svetknihy.cz
W: www.svetknihy.cz



58

左の方から順々に申し上げていきますと、これがチェコにある主な子どもの本関係の研究機関あるいは図書館になります。一番左にありますのがブルノにある児童文学研究所、それから右上にいきまして、IBBY のチェコ支部、そしてその下にあるのが児童書専門の研究者のための図書館でスク図書館の連絡先が書いてあります。そして国立文書館、チェコの国立図書館、東チェコのモラヴィアの図書館、古い都のオロモウツの学術図書館、それから北チェコのリベレツの児童書の見本市の連絡先、あるいはウェブサイトも紹介されております。これらのコンタクト先というのはこちらの図書館にも寄贈しましたが、チェコの文化省から出ている年刊誌に記載されております。これは無料で各市に配布されているものです。

近年出版された児童書

これから 2006 年、2007 年においてどのような興味深い本が出版されたかという話をしたいと思います。短くご紹介していきますけれども、これから続く質問のご参考にもなさせていただきます。左にありますのが、非常に有名な詩人であるミハル・チェルニーク (Michal Černík) という人が書き、フィルチーク (Gabriel Filčík) という画家が挿絵を添えた「絵で描いた世界」 (Malovaný svět a já ho chci vidět) です。そして「ぼくはそれが見たい」

という副題がついております。この本はチェルニークが書いたということもあり、詩的な本で、しかも百科事典的な性格を持つものです。これは 20 世紀の中頃にボフミル・ジーハという高名な児童文学作家が宣伝をつけた子どものための百科事典の伝統を引くものですが、詩的な文章で表現するというところに意義があります。右の方にありますのは「アフリカへ戻ってこよう」 (*Zpátky do Afriky!*) という題名になります。これは音楽家のドヴォルジャークと同じ苗字の人、イジー・ドヴォルジャーク (Jiří Dvořák) が書いております。いろいろな動物たちが自分たちの故郷へ戻ってこようといった大きな冒険のお話を書いたものです。こちらの方に示してあるのは、中がどのような掲載、イラストになっているかということをお見せするためにご紹介しております。

その次にご紹介するのはイジー・ジャーチェク (Jiří Žáček) という非常に有名な詩人が書いたものです。(ライスネル博士もこれは非常に訳しづらいとおっしゃっておりますが) 2006 年に出た一番新しい詩集 '*Na svatýho Dyndy*' です。右にありますが、直訳すると「ヤギの本」 (*Kozí knížka*) ということになりますが、これはジーチャノヴァー (Tereza Říčanová) という女流作家が絵も描いて表したものです。内容を見ると生々しいというか、今見ているのは、ヤギの子どもがいかにお母さんのお腹にいるのか、というようなところです。最後の方には実は屠殺されるような場面もあるのですが、別にこれはホラーでもなんでもありません。ヤギの一生をリアルに書いてあるわけです。お腹にいるところから最後は屠殺されるまで、これは非常に率直に、ありのままの姿を子どもたちに示しているということで非常に話題になっている本です。

左の方にありますが、アルバトロスが出したもので「子どもの世界」 (*Svět dětí*) と訳せますが、ルネニーチコヴァー (Jitka Lněničková) という女流作家が書いています。子どもの昔、あるいは今の状態、生活といったものを中心に、これも百科事典的なことを示す本です。右の方にあります '*Šmalcova abeceda*' は、シュマレック (Petr Šmalec) という著者が書きました。これはアルファベットを教えるための本です。要するに、強引に「いろは本」 (*ABECEDA*) と言える、そういった性格を持つ本です。たとえばこの本の 1 ページになるのですが、これはアルファベットの F の部分です。左上の方に F で始まる富士山を見ることができますし、右下の方ではチェコの非常に有名なキャラクターである「ありのフェルダ」も F から始まりますが、それも見ることができます。これは最近注目されている出版社バオバブから出たものです。

その次にお見せしているのは、左の方が「小さなカエルくんとその仲間たち」 (*Žabina & spol.*) という本です。著者はマグダレーナ・ワグネロヴァー (Magdalena Wagnerová) で、最近非常に有名になりました。さらに絵を描いているのが、スカーラ (Martina Skala) という注目されているイラストレーターです。右の方はアルバトロスが出して 30 年来続いている「オコ」 (*oko*) (オコというのは目という意味です) というシリーズで、これは百科事典です。子どもたちに世界のいろいろなものを見せようという目的で読まれているものです。この '*Naši ptáci*' は、具体的には鳥類についての本になっています。左の方にありま

す ‘*Jak se loví dinosauři, aneb, Co nevíte o historii Země*’ は、先史時代のことを書いた、やはり教育的な目的を持つ本です。「ジノサウルス」という恐竜の名前が出ておりますけれども、注目すべきなのは非常に正確な専門的知識がここに反映されているということです。右の方にあります ‘*Krtek a barvy*’ は、皆さん非常になじみのあるものだと思いますが、「クルテク」というもぐらくんが主人公のものです。この本はいろいろな出版社から出ておりますが、このバージョンは先ほど少しご紹介した「本のクラブ」と訳した **Knížní klub** という出版社から出ているものです。こちらの画面の方でご覧になっているのはもぐらくんのシリーズの中でも、古典の方に属している『もぐらとじどうしゃ』と訳されているものです。このシリーズはご存じのように日本だけではなく、諸外国において翻訳されていて非常に人気があるものです。

これは 2007 年のものから抜き出してきました。左の上からいきますと、先ほどご紹介したミハル・チェルニークという詩人が書いたもの ‘*Pohádkové chvílky dětem do postýlky*’ で「ベッドに行くまでの子どもたちのおとぎ話の時間」というような訳になり、おとぎ話をチェルニークが書き下ろした本です。次の右にある本も、同じくチェルニークが書いたもの ‘*Slovo, slovíčko, otevři se maličko*’ です。これも訳するのが非常に難しいのですが、昨年新しく出た詩集です。その右にある少し赤い装丁の本は、ビオラ・フィッシェロヴァー (*Viola Fischerová*) という作家が書いた「ドロトカ (女の子) とフッシュク (犬) のお話」 (*O Dorotce a psovi Ukšukovi*) です。これは黄金のリボン賞を受賞しました。右の上にありますのが、フランチšek・フルビーン (*František Hrubín*) という 40 年ほど前に没した非常に有名な詩人のもので「毎日のための詩」 (*Říkadla pro celý den a taky navečer*) といいます。そういった言い回し、言葉遊び、なぞなぞとかそういうものをすべて含むのですけれども、これはフルビーンのものとしてこれまで一度もこういった形で出版されなかったのです。

下の段の左にあります *‘Příběhy českých knížat a králů’* は、チェコの貴族と王についての歴史的な話になりますけれども、これを書いたのはイェジュコヴァー (*Alena Ježková*) という作家、そしてイラストを描いたのは、今年の文化省の小冊子にイラストを描いたレナータ・フチャーコヴァーという挿絵画家です。その次にご紹介するのは、「クニハホス」 (*Knihafoss*) という、これもすぐに訳せませんがそういう本です。これは実験的な、画期的な本というふうに言えると思います。そしてその次にあります「ザハードゥキー」 (*Záhádky*)、「謎」というところからきている題名の本なのですが、これも今までなかったタイプの本で子どもには少し難しいかもしれない内容の本になっています。そしてその次にありますのが、‘*Malostranská psí zima*’。パブラ・スカーロヴァー (*Pavla Skálová*) という人が書いた、プラハの伝統的な古い地区の一つに住む年配の女性と 2 匹の犬の交流を描いたお話です。これは 2007 年黄金のリボン賞を受賞した非常にほほえましい内容の本です。

左の上にあります ‘*Pohádky brášky Králíka*’ は詩人として大活躍中のパヴェル・シュ

ルト (Pavel Šrut) という作家が書いた、おとぎ話の性格を持つもので、イラストを描いたのがこれも有名なインドラ・チャペック (Jindra Čapek) というイラストレーターです。次にありますのは '*Perlová zahrada*'。「真珠の庭」とでも訳せる、イジー・トメック (Jiří Tomek) という人の作品です。そのイラストもインドラ・チャペックが描いています。次にありますのは、'*O čertíčkovi*'「小さい悪魔について」とでも訳せるのですが、ボクルコヴァー (Alexandra Vokurková) という作家が書き、カドレック (Pavel Kadlec) というイラストレーターがイラストを描いておまして、現在の子どもの抱えている問題について書いてあります。最後の '*Kocour Mikeš představuje Josefa Ladu*' は詩人のジャーチェクがラダについて書いたものです。それでミケシュという、ラダが書いた有名なキャラクターを仲介として、ジャーチェクが彼や彼の本について紹介しているという非常にユニークな本です。

古典的な児童書

チェコの方ではいろいろと新しい本が出ているのですが、それと同時に昔出た本も皆さんにご紹介したいと思います。こちらはジェデチェク (Jiří Dědeček) という人が書いたもので、虫の名前なのですが「毛虫みたいな虫がヴァイオリンを弾きにいった」(*Šli červotoči do houslí*) という変わった題のもので、イラストレーターはポシュ (Petr Poš) という人です。そして何度か出てきましたシュルトという詩人が書いた詩です (*Příšerky & příšerí*)。題名からして非常に言葉遊びが勝っている本なのですが、それにミクリーノヴァー (Galina Miklínová) というイラストレーターが描いておられます。これも非常にユニークな詩の本です。

そして非常に大きな存在としてイヴァ・プロハースコヴァー (Iva Procházková) という作家がおります。この人は一つの星のような存在で、アンデルセン賞の候補にも何度か出たことのある人なのですが、2年前に出た本でそのまま訳しますと、「ねずみたちは天に属する」(*Myši patří do nebe*) とでも、内容を見てみないと正確には訳せませんが、子どもの本に伝統的ではない「死」(death) をテーマにした本となっています。次の '*Obrázky z dějin zeměpisných objevů*' は2000年に出た本ですが、チェルニー (Jiří Černý) という作家、それから亡くなりましたけどウルバン (Ervín Urban) という画家が書いた、これは地理上の発見について歴史的なことが紹介されている絵付きの漫画になっています。

こちらの左にありますのは日本でも昔に紹介されておりますが、ズデンカ・ベズジェコヴァー (Zdeňka Bezděková) という作家が書いた古い本で、戦後に出版されました。日本語訳は『レニとよばれたわたし：戦争でさらわれた女の子の話』(*Ríkali mi Leni*) です。古典と知り得るかもしれませんが、この機会に注意を喚起したいという意味でこちらに載せさせていただきました。こちらの中身をご紹介しますこととなりますが、次にありますが、チトゥヴルテック (Václav Čtvrtek) というこちらも有名な作家です。死んで何十年にもなりますが「おすねこダミアン チェコのねこの生活」(*Kočíčiny kocourka Damiána*)

というものでこれも最近 1999 年に復刊となったものです。

その次にありますのが、「ライオンが逃げた」(*Lev utekl*)というサーカスに関するお話ですけれども、こちらは 1948 年に最初の版が出まして、それが 2000 年になって復刊されました。これは 1948 年に出た初版本です。こちらもちトゥヴルテックの本と同様、復刊されて話題になったという本です。次に左にありますのが、ドスコチロヴァー(Hana Doskočilová)という女性作家が書いた本 '*Když velcí byli kluci*' で、伝記のようなものです。過去の偉人がどのような子ども時代を過ごしたかということで、どんなに学校で悪い点をとった人でも、大きくなってからは偉人になったというお話です。多くの人の心の励ましになるのではないかというふうに思います。次にありますのは、チェコの子ども本の古典といえる『きつねものがたり』(*O chytré kmotře lišce*)という本で、繰り返し復刊されているものです。こちらは図書館に所蔵されている古いものですが、こちらの方では一番新しいものが載っておりました。右にありますのが、これもフランチシェク・ネピル(František Nepil)という児童文学作家の作品で、「5人のすばらしいおじさんたち」(*Pět báječných strýčků*)という大人の中にある子ども性をテーマにした、いかに大人が子どもっぽくいられるかというお話です。

次にご紹介するのは二つですが、日本語にも訳されているカレル・ポラーチェク(Karel Poláček)を先にご紹介します。20世紀の前半に活躍したチェコの作家というのは、ヨーロッパ的な文脈の中でも非常に重要な人たちが多いのですが、そのうちの一人であるカレル・ポラーチェクが書いた '*Bylo nás pět*'、日本語では『ぼくらはわんぱく 5人組』と訳されているものです。それから右の方には、トゥルンカの絵にもありますが、レンチ(Václav Renč)という人が書いた '*Perníková chaloupka*' 「お菓子の家」という、要するにドイツ語でいう『ヘンゼルとグレーテル』のチェコ版のお話です。これは「お菓子の家」の本の中の 1 ページで、トゥルンカの絵になっております。左の方にご紹介するのは 2000 年に出たイジー・スリーヴァー(Jiří Slíva)という人の「すべてはうまくいく」(*Všechno dobře dopadne*)という本ですが、これも詩の本です。アムレットという出版社から出たものです。右にはシュトルフ(Eduard Štorch)という、チェコでは知られた作家で、ヨーロッパの歴史的な物語から題材をとったものです。

'*Zlomený meč*' 「折れた剣」というふうに訳せるものですが、イラストを描いているのが、これも非常に有名なズデニェク・ブリアン(Zdeněk Burian)という挿絵画家です。

最後になりますけれども、この二つの本をご紹介します。すべてのチェコ人の子どもが知っているような本です。左にはありますのが、ヴラジスラフ・ヴァンチュラ(Vladislav Vančura)という人が書いた「クブラとクバ・クビクラ」(*Kubula a Kuba Kubikula*)という作品です。クマつかいの男の人がこぐまと仲間になっているのですが、その一方で幽霊を非常に怖がるという面白いお話です。続けてご覧に入れましたけれども、一つは「クブラとクバ・クビクラ」にさらに二人のイラストレーターが描いたものでした。今ご覧になっているのはズデニェク・スメタナ(Zdeněk Smetana)という人の作品、その前にご

覧になったのが、オンドジェイ・セコラ (Ondřej Sekora) という「ありのフェルダ」を描いた人ですけれども、彼の挿絵のバージョンでした。その次にありますのが、何度か出てきたジャーチェクという詩人が書いたこれも詩集になります。‘*Kolik má Praha věží*’「プラハにはいくつ塔があるか」という題ですけれども、これも一番初めて出たのは1984年ですが、その後絶えず版を重ねている人気のある作品です。

これでチェコの子どもの本についてのご紹介を終わりたいと思います。本当でしたら、もっとお話しすべきことはあるのですが、時間的な制約もありまして、以上のようなご紹介にとどめさせていただきました。この講演に基づいて皆様からご質問がありましたら、ぜひともお受けしたいというふうに思います。ありがとうございました。

質疑応答

出席者：チェコ絵本について見識が低い者として質問をお許してください。私がチェコ絵本を拝見できるのは、日本の図書館に置いてある日本語に訳された絵本という範囲の中しか知り得ないのですけれども、その中ではとても文字が多くて挿絵的な絵本が多い印象を持っております。日本の絵本には言葉が少なく、絵に物語を語らせるものが多くあるのですが、残念ながらそういうものにまだ触れたことがないのです。チェコの絵本にはそういうものは少ないのでしょうか。

ライスネル博士：それは全体の傾向として言えると思います。チェコだけではなくて、特に中央ヨーロッパの伝統として、確かにテキストの方が絵に勝っているということはあると思います。そしてイラストがすばらしい作家によって描かれているものでも、そういった比重が分量的にかかっているものですから、絵がテキストより下に置かれているといえますか、そういった評価がなされることもあります。それは間違っているのですが、ただそういった傾向というのは確かに我々の絵本の特色としてはあると思います。

出席者：たとえば我々がよく知っている『タンタンのぼうし』（いわむらかずお作 偕成社 1978）があるのですが、タンタンが帽子をぼーんと投げます。「もっと もっと たかく、やあっと なげて」という言葉だけあって、ページをめくると帽子が落ちてきて頭の上に星が乗っています。言葉には表してないけれども、絵に答えを語らせる、ストーリーが流れていくものがあるのです。しかしそのようなチェコ絵本に、まだ少なくとも図書館で出会っていないのでそういう絵本はあるのか、という質問です。

ライスネル博士：今日の話ではどちらかというとテキストについてお話ししたのですが、絵本に関して言いますと、やはりテキストの比重の方が多いということが全般的に言えると思います。ただチェコの作家の中にも、パレチェク、パツォウスカー (Květa Pacovská)、そしてアメリカに移住したシス (Petr Sís)、それから「もぐらくん」のミレル (Zdeněk Miler) というような人たちがいます。つまり彼らは自分でもテキストを書き、絵を描くことがある、それオンリーでやっている方もいらっしゃいますけれども、そのような方の場合にはどちらかというとテキストの方が少なくなるということもあります。ただその場合でもやはり日本のものに比べたらテキストがたくさんあるということが言え

と思います。

出席者：マサリク大学で出されている「ラデニ」（*Ladění*）という専門誌なのですが、なぜ大学でこのような児童書の専門誌を出されるようになったのかを教えてください。大学でこのような一般向けの批評誌を出されているのはちょっと珍しいなと思いました。1990年以降ということは民主化以降だと思いますので、そのような研究をされているからなのか、それとも何か目的があって出されているのか、それはどういうことなのかと思ひまして、質問いたしました。

ライスネル博士：チェコの大学において、我々は唯一の専門的な児童文学関係の研究所として存在するのですが、そういうところが専門誌を発行するというのは特に珍しいことではありません。たとえば我々の教育学部では、ほかに偉大な教育学者の名前を関した「コメニウス」（コメンスキー）という雑誌も出しておりますし、チェコスロヴァキア全体における唯一の研究機関としてこういったものを出しております。そして学術的な目的を持つものですから、我々の方では専門誌が大学から出されるということに何も不思議はないのです。

出席者：詩の本がたくさん出されているということは、たぶん暗唱する文化があるのではないかと思われるのですが、それとともに今日本では、赤ちゃんに対する絵本がたくさん出されるようになりました。先ほどのお話を聞いて、日本でもそうなのですが、子どもというのがずいぶん幅広いと思います。絵本に関して言いますと、割と赤ちゃん、幼稚園児、あと小学生向けに結構細かく分かれています。もちろん読む側としては幅広いのですが、出版する側としては、ある程度限定して出しているような気がするのです。チェコでは赤ちゃん向けや幼児向けなど、絵本に関してはどのように出版されているのかお聞きしたいと思います。

ライスネル博士：チェコにおきましては大体3歳くらいまで読むというよりも触って、見せてというような、3歳くらいまで一つのものというカテゴリーがあります。その上になりますと、3歳くらいから自分で読めるくらいになるまでの範疇がありまして、その上は自分で読んでいく本があるのです。特に3歳から学齢に達するくらいの本に、たとえば先ほどご紹介した、詩になるのですがチェルニークという詩人の本が入ってきます。そこでチェコの子どもたちにチェコ語のボキャブラリーを増やすため、特に工夫されている絵本というのが、ちょうど3歳から学齢くらいに達するまでというカテゴリーの中に多く入っています。

出席者：たくさんの創作絵本をご紹介いただきまして、ありがとうございました。その中で、ちょっと創作絵本、創作本というものが多かったと思うのです。やはり昔話というのは、その国の文化遺産とも言われていますし、この展示の中でもエルベン（Karel Jaromír

Erben)、ニェムツォヴァー (Božena Němcová) という方たちが大分昔話を集めて『おばあさん』など本にしています。その方たちが集めたいわゆる口承文芸としての昔話を、現代の場で絵本にしているといったようなことはチェコでは傾向としてあるのでしょうか。その点をお伺いしたいと思います。

ライスネル博士：エルベンのとくと当然、環境が変わっているわけなのですが、地区によっては結構いろいろな所で、昔話が伝えられていて、それが新しい形で発行されるというようなこともあり得る、ということなのですが、おそらくご質問としては今どのような形でそれが本として、たとえば、エルベンにしてもニェムツォヴァーにしても発行されているかということですよ、おそらく。

昔の版はエルベン、ニェムツォヴァーにしても、その後出たバルトシュ (František Bartoš)、あと 19 世紀から 20 世紀にかけての昔話集というのは出ております。それは繰り返し出ておりますが、今語られているようなものは、やはり 200 年前とは全然環境が違っておりますので、それを採取したようなものは当然ないということです。